

千葉 あやの — 藍染の技術を守る —

「むかしのまんま、むかしのまんま」

のどかに歌うように話していたのは、藍染という仕事でただ一人、人間国宝に指定された千葉あやののです。仙台から北へ六十キロほど離れた栗原郡文字村（現在の栗原市栗駒）で生まれて農家に嫁ぎ、「正藍冷染」と呼ばれる特別な染色の技法を子や孫へと伝えました。その功績が称えられ、昭和三十（一九五五）年に人間国宝に指定されました。

この染色の技法は平安時代に中国から伝わりました。この地区では、千葉家以外にも何軒か染め物をしていましたが、昭和二十五（一九五〇）年ごろには、千葉家を残して他はみんなやめてしまいました。しかし、そのころ、藍染についての調査が行われたことがきっかけとなり、日本に残っている最も古い染色の技法であることが認められ、人間国宝に指定されたのです。

では、どんなことが特別な染め方だったのでしょうか。「正藍冷染」とは、藍という植物を育て、自然発酵させて染色を行う草木染めです。ふつうは火で温めながら染めるので、一年中染めることができず。しかし、栗駒だけに伝えられてきた「正藍冷染」は全く熱を加えることなく自然発酵させるので、気温が上がる六月から七月ごろのわずか一か月半の期間だけしか染められません。そのため、天候や気温に大きく影響され、



麻布の糸を作る千葉あやの（千葉家提供）

大変な手間がかかるのです。さらにおどろくことに、藍を育てることから染めるまでのすべての作業を自分の家で、しかもたった一人で行っていたというのです。あやのの染め方や藍染の作品は極めて価値があるものだと高く評価されたのでした。栗駒山にまだはつきりと雪が残る四月。雪解け水が流れる迫川のそばに、あやのが住む家があります。その周りに、田植えよりも早く藍の種をまくことからあやのの仕事は始まります。八月と九月に、育った藍を刈り取り、葉を天日で乾かします。これを手でもみ、再び天日で乾かして冬まで待ちます。厳しい寒さのなか、三か月ほどかけて発酵させ、おひたしのようなになった葉をうすでついでつぶし、白玉のように丸めて「藍玉」を作ります。これを使って染水を作り、ようやく次の年の六月から始める染めにたどり着きます。



乾燥させている藍の葉（千葉家提供）

また、染めるための麻布も、四月に種をまいて育て、七月に収穫した麻を乾燥させ、糸を作って織り上げていきます。麻布を染水につけ、風に当てながらきれいな色が出るように染め上げていきます。そして、迫川の水で余分な青い染料を流します。洗えば洗うほど、美しい藍の色になります。

このように、千葉家で藍染を受け継ぐ人は、天候や気温にあわせながら一年を通して藍染にたずさわっているのです。まだ真つ暗な朝の三時。あやのは眠いのをがまんして、仕事を始めます。藍染の作業をする時期は、天候や作業の進み具合に合わせて、朝早くから仕事をしなければならぬこともあるのです。作業をするのは、あやの一人ですから、自分がやらなければという思いで、藍染を守るために何とか続けていました。けれど、この仕事は決して楽ではありません。一軒、また一軒と、藍染をやめてしまう家がある中、藍の色で染まる指先を見つめながら、静かに考えこむ日々が続くようになりました。そして、とうとう藍染をするのはあやの一人になってしまいました。

ある日、東京国立博物館で館長を務めていた山辺知行が、あやのの藍染を知り、千葉家を訪ねてきました。

藍：タデ科の一年草で、高さ五〇〜八〇センチメートル。葉から藍染の染料をとることが出来る植物。

人間国宝：演劇、音楽、工芸など芸術的な価値が高い技のうち、特に文部科学大臣によって指定された技を高いレベルで身につけていると認められた人。

うす：きねを用いてもちをついたり穀物をくだいたりする道具。木や石を丸くえくつた形。

山辺が藍染の技術のすばらしさを説くと、あやのは、

「自分ひとりではとても続けられない。」

と、藍染を続けようか迷っていることを打ち明けました。

「やめてはいけないよ、あやのさん。あなたがやめたら後はだれもいなくなるのだよ。」

と山辺は熱心に説き続けました。藍染をやめようかと悩んでいたあやのでしたが、山辺の懸命な思いを受け止め、この栗駒の地で先代から受け継いだ藍染の技術を守りぬこうと決めたのです。

それから五年が経った昭和三十(一九五五)年、染色の歴史のなかで貴重な技術であるということが認められ、藍染の世界でたった一人の人間国宝に指定されました。

昭和三十二(一九五七)年二月十日。あやのの家から火が出ました。その火は家を燃やし、仕事場も、仕事に必要な道具や材料も、いっさいを無くしてしまっただけです。

「ああ、すべてが無くなってしまった。」

そう肩を落とし、途方に暮れてしまいました。しかし、ふと思い出したようにふところに手を入れ、何かを取り出しました。それは、偶然にも肌身につけていた藍の種でした。

「よかった。これで藍染を続けることができる。」

その小さな種はあやのにとって希望の種でした。幸運なことがもう一つありました。近所の人々が「藍玉」の入れ物を米びつとまちがえて家から持ち出していたのです。この火事で多くのものを失ってしまいましたが、その後、人々の協力を得て、迫川の上流に、新しく家や仕事場を建てることができました。あやのは、新しい家



の周囲に、残された藍の種をまいて藍染を続けました。あやのの藍を思う気持ちと努力、そして周囲の人々の願いが繋がっていったのでした。

あやのの教えは、子や孫へと受け継がれ、地域の人に支えられながら、今でもすべての作業を昔からの技法で続けていて、全国各地から注文が入ります。藍染を伝承したあやのの孫嫁であるまつ江は、

「おばあちゃんには、手をきれいにしなさい、染めるときは、はきものを変えなさい、などたくさんのお話を教わりました。これを守らないと、藍の色がきれいに出ないからね。」

と、あやのやまつ江自身が染めた作品を見ながら、こう続けました。

「『お客さんが来なくても、売れなくても、藍染だけは続けなさい』というおばあちゃんの教えも何とか守ってきました。」

あやのが大切にしてきた千葉家の「むかしのまんま」の教えを守りながら、今日も藍とともに生きている人がいます。



千葉あやのの孫嫁(まつ江)の作品

千葉あやの

千葉あやのは、明治二十二(一八八九)年、栗駒郡文字村(現在の栗原市)で生まれた。「正藍冷染」の伝承者として技法を受け継ぎ、昭和三十(一九五五)年に人間国宝に指定された。藍を栽培し、熱を加えず自然発酵させて染める技法は、手間もかかりやめてしまっただけでなく、昔から受け継がれている技法を守り、染め物を作り続け、それを子や孫へと伝承した。

伝承：
古くからの技や文化を受けついで伝えていくこと。